

## 連載 (14) 自由人の日本史 II

## 生活点からの決起

## 米騒動一〇〇年

## その1 アナキストの周辺

武智 忍

ルポライター、猪野健治さんとは、半世紀にわたる厚誼だ。

『日本アナキズム運動人名事典』(ぼる出版)では、おもに無頼派の項目を分担したが、私はさらに西日本の米騒動関係も引き受けていた。

事典が出てまもなくの頃、週刊誌に山口組大幹部のプロフィールが連載されていた。猪野さんの署名記事である。

なかに一人の人物。

「猪野さん、あれ同一人ですよ、若いころ神戸の米騒動で捕まっています」事典の項目を示すと「ホントだ、彼だ」と、猪野さんは苦笑い。

少し長いが事典の文章を引く。

「社会主義者たちが傍視した米騒動で、群衆の先頭に立ったのは無名の庶民であった。

演説の方法もわからず、皆に押し出され、ミカン箱の上に乗って『諸君、諸君』と声をかけただけの(後の言葉

が続かなかつた) 沖仲仕・坂出敬信も事件後はその『諸君』を問われ、懲役八年に服した」

庶民の抵抗。少し骨っぽい人物の台頭——といっても、無名者の行動には、そんなベールが付きまとう。

\*

全国で百万人が加わったとされる米騒動。

警察力では抑えきれず、軍隊が各地に出動。皇居を警備する近衛師団も市民に銃を向けた。

二万五千人以上が検挙され、死刑二人、無期懲役十二人を含む八千人あまりが重罪を課せられた。日本の近・現代史上、最大の大衆蜂起である。

六十年安保闘争や、七十年代の若者の反乱とは比べようもない。

そんな巨大なエネルギーを日本の大衆は持っていたのだ。

いや、秘めているのだ。今も、多分。

はじまりは富山の主婦たちによる「米寄せ」の直接行動。当時の新聞の見出しは「米騒動でなく米一揆。ズバリ」女一揆」の見出しもある。

\*

全国に広がった激しい闘いのなかで、

組織的指導者とは無縁だった米騒動だが、例外的にこれに係わったアナキストは二人いる。

大杉榮と山鹿泰治である。

九州からの帰途、足を止めた大阪で、大杉はこれを目撃。いかにも彼らしくたちまち騒動に身を投じた。

大阪を代表するサンジカリスト逸見吉三さんは、この時十五歳。大杉に付いて、騒乱の街中を駆け回った一人である。

晩年の吉三さんについて、脚本家の笠原和夫は、著作の中で急進派グループの黒幕であるかのように描写しているが(『破壊の美学』『幻冬舎』)、吉三さんの実像はこれとは大違い。かつての和田久太郎との日々を楽しげに語り、若年の私たちには、いかに官憲の尾行をまくか、を熱っぽくアドバイスする。



山鹿泰治、三〇歳のころ(CIRAカレンダーより)

終生、変わることはないロマンチストだった。大杉と大阪の米騒動については『墓標なきアナキスト像』(三一書房)があるからここでは省略する。

\*

一九一八年八月。富山から飛び火した米騒動は、東七条派出所への襲撃で京都市中に燃え広がった。

前年、京都に帰り、印刷店を営んでいた山鹿は、この時二六歳。

下京区一帯で群衆が米屋を襲撃しているの知らせを聞くと、いわば反射神経のバネで騒動の渦中に飛び込んだ。クールな山鹿を突き動かす、もう一つの本能である。

『京都地方労働運動史』によると、長沢青衣(確三郎)とはこの時に出会ったようである。(長沢はこの後、秘密出版事件で山鹿と共に検挙され、出所後は上京して望月桂の黒曜会に参加している)

警官に取り押さえられていた青年を山鹿らが力ずくで奪い返した。

「この後、義兄弟となり、のちのち付き合うようになった」(たそがれ日記)とあるのは、長沢のことである。

〈続く〉